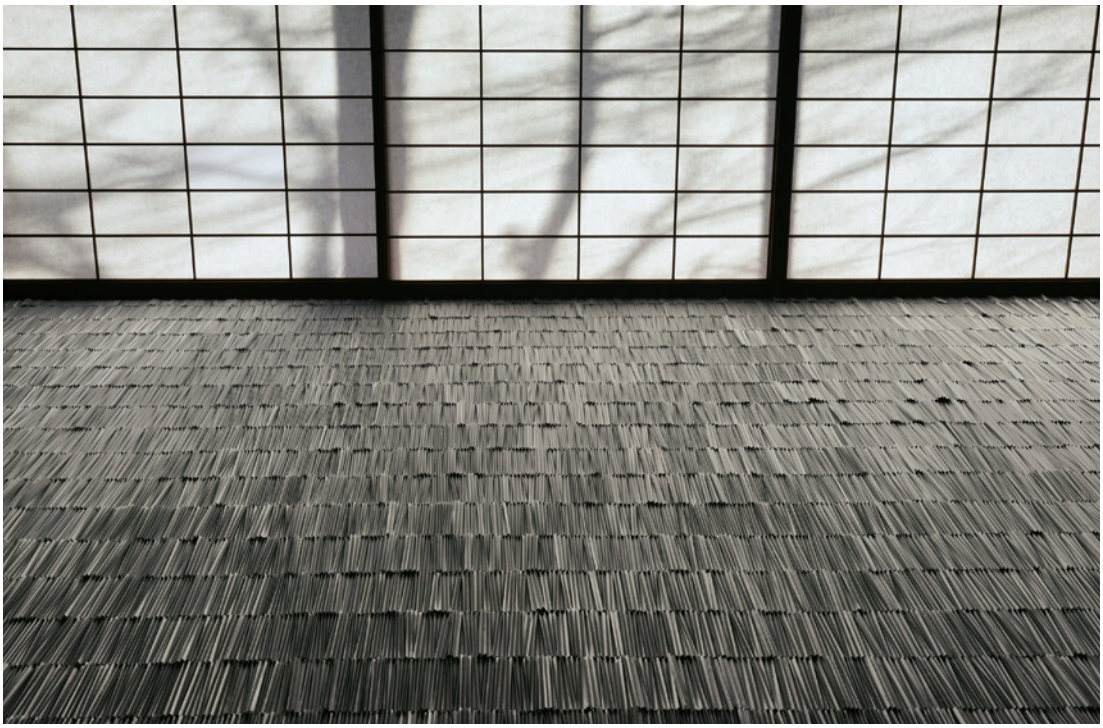
2020年11月1日発行（毎月1回1日発行）（75巻11号）ISSN 0035-7774

労働の科学

Digest of Science of Labour

2020 November 11

Vol.75, No.11



特集 倫理と社会的責任 働くことの未来・持続可能な社会(2)

働くことの意味を問い直す―社会的なつながりのなかで／武田晴人
持続可能な社会と企業サステナビリティ―企業を取り巻く環境の変化の視点から／出見世信之
産業保健活動のあり方と倫理／堀江正知・永野千景
これからの科学者の社会的責任／藤垣裕子
AIとルール―マルチステークホルダー・プロセスの意味するもの／大屋雄裕
研究者倫理とこれからの研究活動の課題／青木和夫
産業安全で技術者が問われていること／中村昌允
診療室から見える職業病の課題―不可視化による不公正を克服するために／毛利一平

巻頭言

生産者と消費者がつながり，喜び合う関係をつくる
大信政一

労働を科学する⑯
田中 茂

歌舞伎で生きる人たち⑫
湯淺晶子

大原記念労働科学研究所

Digest of Science of Labour

労働の科学

2020 November 11
Vol.75, No.11

巻頭言　俯瞰（ふかん）
生産者と消費者がつながり，喜び合う関係をつくる …… 1
大信 政一［パルシステム生活協同組合連合会 代表理事理事長］

作品　Jitsugetsu：個展
素材　銀紙
2019年5月10日〜19日
カホギャラリー・京都
KAHO GALLERY
撮影　髙見晴惠
表紙デザイン：大西 文子

特集　倫理と社会的責任
働くことの未来・持続可能な社会（2）

働くことの意味を問い直す
社会的なつながりのなかで
……［東京大学経済学部］武田 晴人 …… 4

持続可能な社会と企業サステナビリティ
企業を取り巻く環境の変化の視点から
……［明治大学商学部］出見世 信之 …… 8

産業保健活動のあり方と倫理
……［産業医科大学産業保健管理学研究室］堀江 正知，永野 千景 …… 12

これからの科学者の社会的責任
……［東京大学大学院総合文化研究科］藤垣 裕子 …… 18

AIとルール
マルチステークホルダー・プロセスの意味するもの
……［慶應義塾大学法学部］大屋 雄裕 …… 22

研究者倫理とこれからの研究活動の課題
……［日本大学理工学部］青木 和夫 …… 26

産業安全で技術者が問われていること
……［東京工業大学 環境・社会理工学院］中村 昌允 …… 30

診察室から見える職業病の課題
不可視化による不公正を克服するために
……［ひらの亀戸ひまわり診療所］毛利 一平 …… 36

Graphic

ディーセント・ワークを目指す職場 23 [見る・活動](118)
..... 長須 美和子 ..... 口絵

Series

労働を科学する (16)
化学物質の経皮吸収曝露を防ぐために
化学防護手袋の透過と劣化について学ぶ ..... 田中 茂 42

凡夫の安全衛生記 (47)
「60点の知識」資格を取ってみた ..... 福成 雄三 50

Column

Between (11)
「作」について ..... 髙見 晴惠 49

Cinema
『希望の灯り』
統一ドイツと「職場の連帯」の30年 ..... 小林 祥晃 52

KABUKI
幸助餅
歌舞伎で生きる人たち その十弐――紙一重の哀歓 ..... 湯淺 晶子 54

Talk to Talk
流れるままに ..... 肝付 邦憲 56

勞働科學のページ 60

次号予定・編集雑記 64

生産者と消費者がつながり、喜び合う関係をつくる

大信 政一

おおのぶ まさかず
パルシステム生活協同組合連合会
代表理事理事長

新型コロナウイルスの影響によって私たちを取り巻く働く環境は、大きく変化した。人との接触制限は面会からオンラインへ移行させ、移動制限は視察や会合などによる相互理解の機会を奪っている。価値観や考えを深く理解するためには、直接会って意見を交わすことが欠かせない。事務連絡ならインターネットを介する利点は少なくないが、中長期的な信頼関係の構築という観点では、いずれ弊害が顕在化する懸念を抱いている。

パルシステムグループは創立以来、およそ半世紀にわたって産直を実践してきた。その根底には、いわゆる物流的、商流的な「産地直送」だけにとどまらない関係性がある。生産者と消費者が相互に訪問し、それぞれの実情や価値観を理解することで、商品を介して人と人がつながり、ともに支えあう仕組みを作り出してきた。

生産者と消費者のつながりづくりは、これまでもあらゆる場面で活動の支えとなってきた。東日本大震災ではコメを中心とする食料が品薄となるなか、生産者はあらゆる手段と工夫を講じて商品を納品し、組合員が助けられた。逆に、産地が大規模災害に見舞われると、組合員から億単位の募金が寄せられ、早期の復旧と生産再開に寄与している。原料を産直産地に限定した加工食品はほぼすべて人気商品となっており、事業的にも欠かせない要素となっている。

こうした成功事例を蓄積するうえで欠かせない要素が、交流活動による相互理解だ。例年は、年間3万人近くの組合員ならびにその家族が産直産地を訪問する。生産者を招いて開催する料理教室や学習会は、申し込みが定員を上回るほどの人気だ。農業体験や工場見学などを通じて食卓に上るまでの物語を知ることで、組合員は産直産地のファンとなり、品質や価格を超えた価値を共有する。私たちの活動の根源が機能不全に陥ったといっても過言ではない。

生産者と消費者のつながりを保ち、新たな関係の形を模索する動きは、すでに始まっている。オンラインを活用した交流企画では、中継映像を駆使して生産者による生の声を届ける。出かけることなく家庭で参加できる気軽さから、多くの交流企画で訪問型以上の申し込みがある。幼い子がいたり、足腰が弱く移動が困難だったりする人も自宅から参加できることから、訪問型とは違う可能性を感じている。

ワクチンや特効薬の開発といった劇的な進展がないかぎり、私たちは新型コロナウイルスの影響を受け続けることになる。解決までは年単位の時間がかかることを覚悟しなければならない。こうしたなか、社会にとって人と人のつながりを実感する機会がさらに求められる時代となることが予想される。人と接触できない寂しさを経験し、経済より大切な価値を見出す人が増えていることは、想像に難くない。

パルシステムグループは2020年6月、「『たべる』『つくる』『ささえあう』ともにいきる地域づくり」を目指す「パルシステム2030ビジョン」を定めた。そこにも「商品を購入する行為」そのものが人とつながる一端であることを呼びかけている。直接話し合うことができなくても、商品購入によって代金が生産地へ還元され、再生産のみならず地域活性化や環境保全などに活用する循環が築かれる。その循環を多く体現し、生産者も消費者も、そしてそれを届ける職員も喜びあえるような協力関係をこれからも築いていきたい。